第15号　20円
昭和43年11月25日

内　容

人権の尊重について……1
開館三周年記念行事……2
第18回大学共同セミナー 4
日韓学生懇談会…………5
第19回大学共同セミナー 6
千人会第四回報告………7
三年間をふりかえって…8
指導教授推薦図書………10
利用状況…………………11

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人　大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
電話　0426—76—8511～2
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電話　東京（270）4431
振替口座　東京74590番
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

人権の尊重について
—国際人権年にあたって—

東京大学名誉教授　横田喜三郎

人権の歴史は古くは英国のマグナカルタからつづいているが、比較的近代的なのは、一七七七年のアメリカの独立戦争である。つぎは一七八九年のフランス革命の人権宣言である。この二つがスタートとなって、自然的あるいは自由権的人権というものが普及した。それから一九一九年のドイツのワイマール憲法によって生存権的あるいは社会的人権が認められるようになった。一九四二年には英国のチャーチルが「今度の戦争は人権の戴冠式をもって終る日が来るであろう」と演説した。こうして国際連合憲章に人権の規程が設けられた。

世界人権宣言はルーズベルト大統領夫人を委員長として人権委員会が草案をつくり、一九四八年一二月一〇日に採択されたものである。特徴は、第一三条「人はすべて自国を含むいずれの国をも立ち去る権利および自国に帰る権利を有する」と、第一四条「人はすべて迫害からの避難所を他国において求めまた有する権利を有する」という「国際的人権」ともいうべき規程である。政治的に不安定な国では非常に重要な権利である。

明治憲法では自由権的人権だけしか認めていなかったが、新憲法ではそれに加えて生存権的権利についても相当くわしい規程がある。しかし最も重要なことは明治憲法では常に「法律ノ範囲内ニ於テ」、あるいは「法律ニ定メタル場合ヲ除ク外」という制限が設けられていたが、新憲法では「この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在および将来の国民に与えられる」とあるから、法律をもってしても制限することができないという考えにもとづいている。しかし公共の福祉に反する場合は制限が加えられる。

現代の日本では人権の尊重ということが特に問題である。

戦後人権ということがよくいわれるが、それでは十分尊重されているかというとかなり疑わしい。人権とか自由ということはすべての国民に保障されたものであって、自分だけの人権や自由を強調するあまり、他人の人権や自由を侵害してはならないということである。多くの日本人の場合に、この点が欠けているように思うのである。すべての人が人権と自由をもつためには、各人の人権と自由がある程度制限されるのはやむを得ない。これが「公共の福祉に反する場合には」ということにあらわれている。要するに自分の人権は他人の人権と両立する限りで認められているということを十分意識していなければならないと思うのである。

一つの例は街頭におけるジグザグデモとかスクラムを組んだデモである。各人がデモを行なう権利はあるわけであるが、いやしくも道路であれば、すべての人が自由に通行する権利もまたあるわけである。道路全体の通行を阻止するデモがはたして適当な「表現の自由」と認められるか。二つの権利はともに調和的に認められなければならない。したがってデモも片側を規則正しく整然と行進することによって、十分自分たちの意志表示はできるわけである。

アメリカの有名な政治家ダニエル・ウェブスターが「自由は健全な制限に比例する」といったのもカントが「人々の意志の限界を定めたものが法律である」という意味の政治に関する定義をしたが、明らかにパラドックスではあるけれど、やはり一面の真理がある。

もう一つ例をあげれば、いわゆる集団威力による人権の侵害である。たとえば労働組合、日教組、最近では学生運動にその傾向が強いが、集団の力によって一人あるいは数人に対して交渉と称して威力を加えることである。数時間から数十時間も相手を閉じ込め、相手が承知するまでやめない。ついに相手が心身ともに疲れ果てて入院するというようなことが頻々と行なわれる。これなどはその人の健康と生命と自由を侵害するものであり、これを社会が黙っているということは人権が本当に意識され尊重されていないからである。

こうした集団威力を話合いだというが、何度も繰り返して、相手をうんといわせるというのは本当の話合いではない。初めて意見をきいた場合は、それが正しければ反省して自分の意見を変える可能性があるが、同じ意見を二度繰り返されたからといって、自分の意見が正しいと思う場合は、それを変えるということはありえないと思う。

とにかく繰り返すことは決して話合いではない。人権の侵害であるというべきである。

（開館三周年記念講演の概要に過ぎない。横田先生にご校閲していただいたのでないから、文章の責任は全く編集者にある。あまり省略したので不本意な文章になったこともお許し願いたい。）

讃えられる三年の歩み

開館三周年記念行事行なわる

昭和43年7月26・27日

昭和四〇年七月に開館して早くもこの七月で三周年を迎えた。夢我夢中の三年であった。幸い多き三年であった。すばらしい先生方が多数応援して下さった。すばらしい学生が多数利用された。こうして大学セミナー・ハウスらしい特有の雰囲気が生まれた。学問的な環境が創造された。すばらしい成果があがった。セミナー・ハウスの存在価値がようやく社会から認められた。平塚益徳博士は『朝日新聞』に連載された「大学のあり方」という論文の結尾において、大学セミナー・ハウスこそ、今後の日本の大学の真にあるべき姿を明示しているといって評価された（昭和四三年四月二日発行）。

お祝いの花たばを手にされる上代先生

『毎日新聞』の余録は全面を費して大学セミナー・ハウスの活動とその成果を紹介された（昭和四三年四月二日発行）。

『読売新聞』の東風西風で手塚富雄先生は、今の大学の欠陥とそれを救う方向をさしているといって栄えているセミナー・ハウスの役割を書いてくれた（昭和四三年七月一〇日発行）。

かくして諺のごとく大学セミナー・ハウスは三年の勝負を経て独自の存在を示すまでに見事に成長した。開館三周年を迎えて、計画の成功を祝うことのできる幸いが出席者の一致した感じであろう。

第一部　記念講演

今年は国際人権年に当るので殊にこの題を選び前最高裁長官横田喜三郎氏という最適任者にお願いした。

立教大学教授久保田キヌ子氏が司会。増田四郎理事長が開会の挨拶と講師の紹介。別掲のごとき内容の講演が多数の来賓と共同セミナー参加学生でうずまった講堂で約一時間行なわれた。

第二部　お祝いパーティー

午後三時半から四時まで、本館食堂を満員にして日本女子大学の山本和代先生のさわやかな司会で楽しく進行した。三周年記念のお祝いと八二歳となった上代たの先生の長寿を祝い、あわせて上代先生がセミナー・ハウスにそそがれた熱情に感謝する会でもあった。今日は創立の中核的役割を果たされた大浜信泉・茅誠司両先生も同席され、上代先生を加えて三人の顔がそろったわけである。

理事長増田四郎先生の挨拶に始まり、立教大学生のカルテットが奏されると、会場は一段と明るくなった。祝辞の第一番は茅誠司先生で、上代先生のよき友として、セミナー・ハウスの同志の一人として、心暖まる話の中にセミナー・ハウスのつぎの発展の夢を述べられた。つぎは平塚益徳先生で永遠のヤングレディ上代たの先生をユーモアたっぷりに紹介され、女子大学教育につくされた功績を讃えられた。

教師側からは、日本女子大学の一番ヶ瀬康子教授が教え子らしい感情もこまやかに上代先生に感謝され、都立大学の唄孝一教授が創立当初のセミナー・ハウスを回想して今日の成長を喜ばれ、東大の坂本義和教授が共同セミナーの指導教授として、現在の大学の紛争からセミナー・ハウスの生活を評価され、学生側を代表して早大の重森寿君が体験的感想を述べられた。

学生から上代先生に花たばが贈られ、職員代表から上代池のサインボードが贈られ、東京女子大学の林まさ子さんがシューベルトとモーツァルトの二曲を歌われると、上代先生は祝福の中心となられた。

長野の旅先からおくられたつぎのごとき森戸先生の祝電が飯田専務理事から紹介された。友情かくのごとく濃い。

「八二歳の長寿をお祝いし、女子教育のため長年のご努力を感謝します。百歳まで働こう会の会長として、先生がこれからもさらに元気で百歳まで働いてくださるようお祈りします。　森戸辰男」

上代先生がマイクの前に立たれ気品とユーモアを交えて感謝の言葉を印象的に淡々とのべられた。

参会者の中には四十余名の日本女子大の同窓生も顔を見せられ、喜びをともにされ、このお祝いの会に一層の盛況を加えて下さった。

これから一同は第六群の中庭に足を運ばれ、上代池のほとりに集まり、もう一度上代先生の長寿をお祝いした。くわしくは別記の北野美枝子さんの手記にゆずりたい。

（付記）

大学セミナー・ハウスは急速に発展し、二年目に拡充計画をたて第二回の募金運動を開始した。去る五月末までに一億五千万円の目標額を達成した。わずか一年間でこのような募金を成功させたのは、理事長増田四郎先生の大きな奉仕があったればこそである。開館三周年記念のパーティー席上で、上代たの先生とともに感謝をうけられた。先生には記念樹のサインボードが贈られ、椎の木が講堂からサービス・センターに通ずるプロムナードの中間に植えられた。大木になれよ。記念樹らしく。

上代先生を囲んで（図書館前にて）

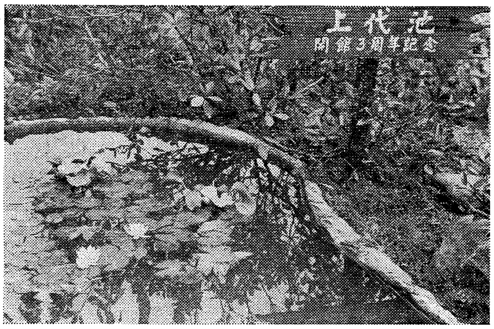
上代池

心をこめた贈物

北野美枝子

大学セミナー・ハウス—飯田専務理事—上代たの先生というのがわたしの連想であります。飯田先生の夢をそのままうけとめ、前進せしめられた上代先生の青年のような熱情には、感激を通りこして一種の衝撃のようなものに、はげしくゆさぶられるのです。同時に飯田先生のセミナー・ハウス実現に傾けられたあの熱情にも感動しないではいられません。

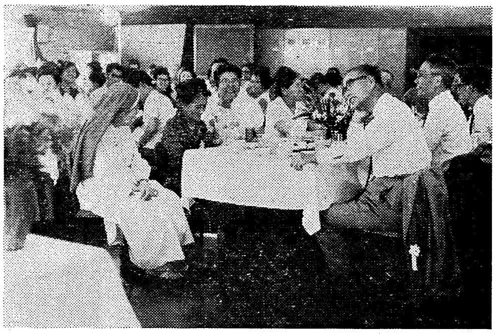
開館三周年記念をお祝いするセミナー・ハウスが、関係の深い上代先生のご長寿をお祝いし、同時に創立当初からのお骨折りに感謝する意味で構内に「上代池」をつくられるという計画があることをかねてからうかがっておりましたので、私は喜んでその会に出席いたしました。



第六群の中庭に上代池生まる

当日は夕刻には俄か雨がありましたが日中はからりと晴れ渡り、相当な暑さでもありました。しかし私には忘れ難い日でありました。あの日出席された日本女子大の同窓生とともに、私は先生がすっかりお丈夫になられ、このすばらしい贈物をうけられる光景に接しました。

茅先生や平塚先生などからお祝いのことばが述べられ、学生から花たばを贈られ、セミナー・ハウスの職員から「上代池」のサイン・ボードが手渡されました。巧みなプログラムにしばし拍手がつづきました。お礼に立たれた先生は「年をとるのも万更悪くないですね」とおっしゃり、先生に捧げられた数々のお祝いの言葉や賛辞に対しては「いま皆さんがおっしゃったことは、私はあまりおぼえておりません。そんなこともあったでしょうか」と先生独特の渋いユーモアで答えておられました。先生のお好きな音楽のおもてなしまでであって、このすばらしいお茶の会は終りました。



なごやかな風景—平塚先生のうまいお話—

そのあと私どもは外へ出て、しばらく丘の中の道を第六群まで歩きました。前日に完成したという「上代池」の周りに集まりました。「上代池」とは、どなたがつけられたのでしょうか、味のある名称です。緑につつまれたいくつもの丘陵の眺めも、借景というにはあまりにもこの池とよく調和しています。二つの池は小さな流れによって結ばれ、この浅瀬は小鳥の水浴びのためにという大原恭子先生のアイディアらしいです。

飛び石の上に立たれた上代先生が大きな緋鯉を網にすくわれ水中に放たれた時には一せいに拍手がおこり、たのしい山の歌がわきおこり夕暮に近い多摩の山に流れました。こうして飯田先生のお心づくしの計画が多くの人々の協力で立派に成功しました。

あんなにも愛しているセミナー・ハウスに上代先生の池がつくられました。先生はこの池のほとりに立たれてあの美しい丘陵を見渡され、また何かをお考えになるでしょう。永遠にチャーミングなヤングレディの夢は果てしなくふくらむことでしょう。

（日本女子大学図書館友の会）

驚きと、喜びと

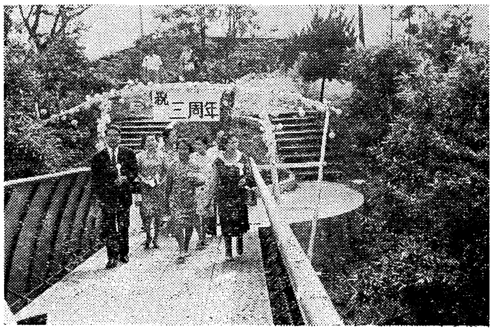
三周年記念会に出席して

明治大学名誉教授　小出廉二

大学セミナー・ハウスのある野猿峠は、武蔵野の丘陵地帯の風光を満喫することのできる景勝の地である。私が、かつて、セミナー・ハウスを訪れたときは、中央の変った形をした大きな建物と、丘の上に散在する小さなマッチ箱のような建物とが、ようやく、姿をあらわしはじめたころで、これが、どのように進展してゆくか、その将来が危ぶまれていた。ところが、先般、開館三周年の記念行事に、久方振りに参加したときには、セミナー・ハウスは、すっかり完成して、堂々たる姿で私を迎えてくれた。私は、少なからず驚くとともに、心からよろこんだのである。これはひとえに、中心となってこの事業を推進された各位の、善意と、熱意と、献身的なご努力とによるものであって、人の善意のとうとさが如実に示された、典型であるといってよいと思う。

三周年記念のパーティが食堂で開かれ、食堂の壁に、「思想は高潔に、生活は簡素に」という標語の額がかかっているのをみて、セミナー・ハウスが日本の大学の中に存在する理由がわかり、心の暖まる思いがしたのである。

このころの大学教育に欠けているものの一つは、教師と学生とが、学問と人生とについて、親しく語り合う機会にめぐまれないことである。大学セミナー・ハウスがこの欠陥を補うために役立つとともに、これが一大学内にとどまらないで、広く、国・公・私立の各大学間における教師と学生との交流の場として、一層利用せられることを切に望んでやまない。



茅夫人、久保田・一番ヶ瀬両先生の女性たちと平塚先生

開館三周年記念

第18回大学共同セミナー

昭和43年7月26・27日

主　題——平和と人権

▨主題の主旨

私たち各個人が人間らしく生きる上で平和がいかに重大な意味をもつかが、今日ほど強く認識された時代はない。しかしこれまで国際政治は、とかく国家間の外交という視点からのみとらえられ勝ちであったが、今回のセミナーではこうした旧来の枠組にとらわれず、国際関係を個人のもつ人間としての権利という角度からつきつめて考えてみたい。そのために、一方では国家より高次の組織としての国連の機能や、国家という枠組では処理できない南北問題の意味を明らかにし、他方では個人の基本権の立場に立って、国家や国籍が現代にどのような意味をもつかを考え、さらに平和と人権を守りつつ社会を変えて行く行動原理としての非暴力の思想の問題にも取り組んでみたい。

〈全体講義〉

平和と人権について

東京大学教授　坂本義和氏

〈セクション指導者〉

A　国際連合と人権
立教大学教授　久保田キヌ子氏

B　平和と南北問題
東京大学教授　川田　侃氏

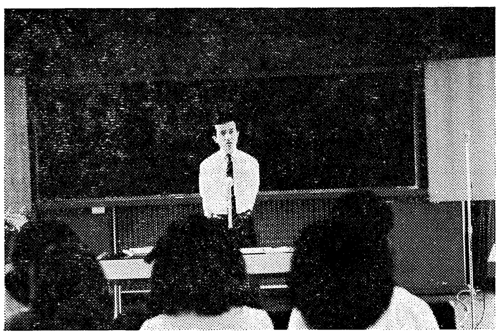
C　亡命と人権
明治大学教授　宮崎繁樹氏

D　人権と非暴力
東京大学教授　石田　雄氏

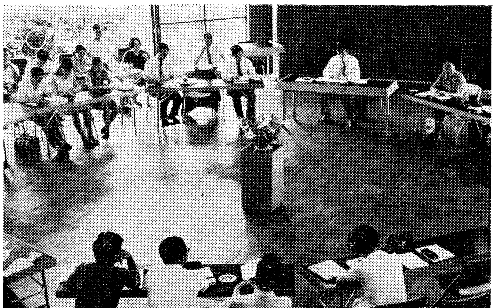
〈参加学生〉

七九名（うち女子四〇名）

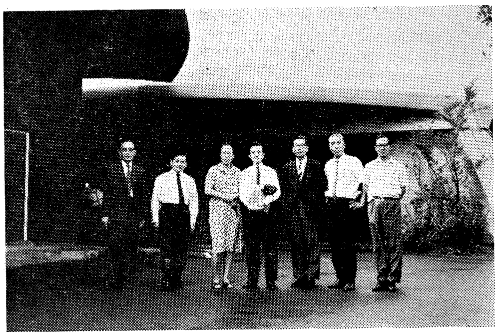
早大（九）、日本女大（八）、東大（七）、津田塾大（七）、東京女大（六）、外語大（六）、ＩＣＵ（四）、一橋大（四）、中大（三）、立大（三）、成蹊大（三）、独協大（三）、お茶の水女大（二）、明大（二）、青学大（二）、慶大（二）、東京医科歯科大、神奈川大、明治学院大、千葉大、実践女大、国学院大、静岡大短大、学習院大各一名。



全体講議の坂本教授



最後の全体討議



左より川田、宮崎、久保田、坂本、石田、飯田、西村の諸氏

忘れてはならない体験

荒木　伸怡

各セクション、深夜ゼミ、全体討議等において、礼節を弁えつつ臆せず自己の信ずる所を述べ、責任感に溢れ確たる信条を有する学生たちに僕は頼もしさを感じた。テスト的人間等と旧制出に酷評されつつも、戦後の民主教育はわれわれ戦争を知らぬ世代の中へ着実に根をおろしてきている。体制に押し流されて、侵略戦争の実体を知りながら、抵抗をしないがゆえの結果的協力をしてしまい、または信条をいつわり積極的に協力した旧制出の多くのインテリたち。戦争突入に身を挺して抗すべきだったのではなかろうか。行動の伴わぬ知識は有害無益である。しかもその大部分は、どうしようもなかったのだという言葉で自らの戦争責任をのがれようとする。自己批判を欠いた者は次の戦争へもおそらく押し流されて行くだろう。他山の石以って玉を攻むべし。

人権の根本は生命権である。国内では殺人罪なのに、戦争になると勲章をもらえる矛盾。国家が最高価値であると考える限りこの矛盾は解けない。国家といえども制約がある。それは人間の生命権をはじめとする人権の尊重。これは人類普遍の原理であって、立法化すれば制限し奪ってもよいものでは決してない。最大限の尊重と最小限の制限のみが許される。日本国憲法を素直に読めば、それが正に人類普遍の原理とされる点で大日本帝国憲法と根本的に異ることが誰にも解る。

個人の資格で参加された西村教授の、自己の体験と信念をわれわれに伝えんとする意思力、行動力に敬意を表する。〝平和と人権〟このテーマは一度のセミナー参加ぐらいで人権年だからといっても簡単に結論の得られるような生易しいものではない。一緒になって真剣に考え指導して下さった坂本、久保田、川田、宮崎、石田諸教授とともに今後も考えつづけ、平和と人権への努力を、少なくとも最終的に戦争に突入してしまうまでは、各人が各自の立場でつづけることを誓いつつ別れた。あのヒグラシの声の一段と澄み渡る八王子の丘をわれわれは決して忘れないだろうし忘れてはならない。

（東京大学大学院一年）

（5頁より）

セミナー・ハウスの機能は、今回も十分に発揮された。若い世代の知的交流の場として、大学間や国家間の区別をのりこえた場として、セミナー・ハウスの存在価値は再確認されたと思う。次回には、いっそう本格的な国際的親善セミナーが、少なくとも二泊三日以上のスケジュールで、今回の経験の上に積み上げられ、発展していくことを願ってやまない。

日韓学生懇談会

〔期日〕
昭和43年7月31日～8月1日

【日本側】
東京大学名誉教授　植田捷雄氏
立教大学教授　久保田キヌ子氏
成蹊大学教授　宇野重昭氏
〈参加学生〉一四名（うち女子七名）
早大（三）、成蹊大（三）、青山学院大（二）、東大、ICU、北大、独協大、聖心女子大、京浜女子大各一名
〈特別参加〉東大池上ゼミ二〇名

【韓国側】
団長　李箕永氏
副団長　李世基氏
団員　一六名（うち女子六名）

◇

日韓学生共に語る（久保田教授司会）

日本ユネスコ協会連盟の招きで訪日した韓国学生団一行は、日本滞在一ヵ月の最終プログラムを日本学生との自由討議の機会とし、当ハウスに一泊した。まず夕食をともにし、宇野教授の進行により相互に自己紹介をしたり、歌を交えたりしたあとで場所をラウンジに移し、久保田教授を司会者として懇談会にはいった。約四時間、話しかつ論じ、日韓両国の若い世代が相互理解を深め合った。ゲストとして大先輩の植田東大名誉教授も参加され、よき指導をされた。

韓国学生は翌朝九時に当ハウスを出発したが、一方日本側学生は宇野教授の指導で国際関係セミナーを行ない、第一日は午後三時から六時まで、アジアおよび韓国の歴史について学び、第二日は午前九時半から一二時まで、主として国際関係論入門の演習をし、昼食後解散した。

一泊の短いセミナーであったが、韓国学生と討論したり、小規模ながら異色あるセミナーを持つことができたことは、適任者に宇野教授を得たからであった。

若い世代の国際的な知的交流の試み

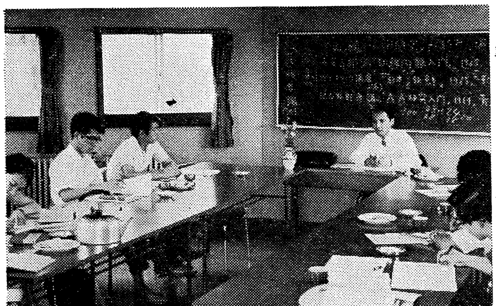
成蹊大学教授　宇野　重昭

今回の日韓学生の親善セミナーは、予想以上に成功だったと思う。というのは、この親善セミナーによって、日韓学生が相互に知識を交換し、意見を述べあい、親睦を深めえたことを意味する。実際それは予想以上であった。元来このセミナーは夏休みにはいってから早急の間に計画され、実行されたものであって、教師も学生もはなはだ準備不十分であり、私自身、尊敬する先輩、安藤英治教授からのお話で、不適任を承知のうえでお引き受けしたセミナーだったからである。一体こんな準備不足で何ができるのか、一晩だけ、それも英語で話しあって実のある討論ができるものかどうか、だいたい日本人学生は自分の意見を表明することができるだろうか、等等、私の危惧はつきなかった。しかし若い世代の明朗さと積極性は、簡単に私の危惧をのりこえた。たしかに親善交流のマナーと英語の熟練度では、韓国の学生の方が日本人学生を上廻っていた。しかし日本人学生もかなりよく討論し、立教の久保田教授の適切な指導とあいまって、討論内容のレベルも低くはなかった。また討論会、小集団に分かれてからの自由懇談会も有意義だったように思われる。

ただ若干の批判めいたことをつけ加えるならば、どうも討論内容が噛み合わないときが少なくなかった。これは、根本的には時間が足りなかったこと、さらに一般的にいうならば、双方がじっくり相手の主張に耳を傾け、その言うところをもう一歩突っ込んで理解しようとする姿勢が弱かったためということができよう。また、日韓学生双方ともに、相手の国の具体的状況を知ろうという積極性が乏しかったように思われる。

しかし早急の間に準備された僅か一晩のセミナーであったことを思うならば、今回以上のことを望む方が無理というべきであろう。

（4頁につづく）


韓国を知るために（宇野教授セミナー）

思考の復活

滝沢　信一

大学共同セミナーという体験は自分にとって何であったのか。これは私には非常に難しい問いである。セミナーのテーマが「平和と人権」であったことが一層答えを難しくする。なぜならばこのテーマは現在の世界全体について語ることとなるがゆえに、ある面で容易に、自己の問題ではなく〝遠いどこか〟の問題に転換できるからである。

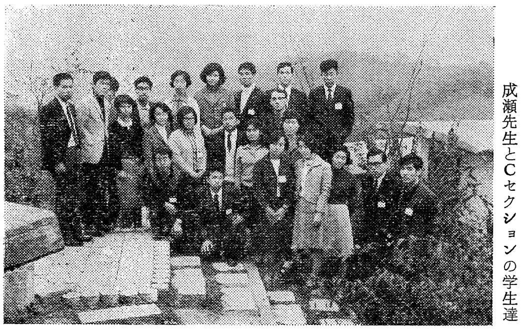
このセミナーで得たもの、それは決して平和および人権に関する問題解決のための技術や方法などではなかった。自分にとり、それは人生に対する態度の確認以外にはありえなかった。ともすれば無気力、無批判、無関心という逃避に陥ってしまう日常の生活において、共同セミナー＝思考活動復活を意味するものとなっている。自分がこのような成果を得る原因となったセミナー、セミナー・ハウスの方々に深く感謝しています。ただしこのセミナーという特殊な状況においてでしかわれわれは心から話し合えない、ということは何を意味するのか。私はこの問題をも考えざるを得ないのである。

（ICU三年）

新しい大学のヴィジョン

東京大学助教授　成瀬　治

過ぐる一〇月一九、二〇日の両日、八王子の大学セミナー・ハウスで過ごした時間ほど、近ごろの私に充実感を味わわせてくれたものはない。何故だったのか、と理由をよく考えてみると、結局のところ出てきた答えは、「大学のセミナーらしいセミナー」がそこにあったからだ、というに尽きる。たしかに、独り机に向かって読書に沈潜するとき、また著述に専念しているときなど、それはそれできわめて充実した時間であろう。


成瀬先生とCセクションの学生達

しかし、去る六月下旬、私の勤める大学の学生たちが無期限ストにはいって以来、大学教師たる私は、どれほど勉強にうち込もうとしても、何か形容しがたい欠落感に悩まされつづけていたのである。その欠落感の由って来るところが何だったのかを、私はこんど八王子の丘の上ではっきり認識させられたのであった。

周知のごとく、ちかごろの大学紛争でいちばん中心的な争点となっているものは、「管理者」としての教官のありかたである。大学の教師が、研究者、教育者であると同時に、学生「管理」（いやな言葉だが）の一端をも担わされているという、いまの「大学自治」の現実において、しかも人格的なコミュニケーションを破壊するマンモス化の中にあっては、大学という共同体の本来の使命や目的にとって全く副次的な問題が、あたかも中心問題であるかのごとく不当に拡大され、「政治化」されてしまっているのだ。それを嘆かわしいことではないか。嘆かわしいことと思っていただけに、私は今回の共同セミナーで、はからずも真に大学らしい大学、いわば「純粋培養された大学」のイメージを見出し、新鮮な驚きと感動をおぼえずにいられなかったのである。

この「純粋培養された大学」においては、「管理運営」と「教育」との間に、美しい分業が成り立っていた。しかもそのさい「教育」は、いかにも大学らしく、ともに真理を探究する教師と学生との、きわめてインティームな「対話」を通じて行なわれる。その意味で「教育」と「研究」とがまさに一体をなしていた。飯田専務理事は、閉講式にあたって、いみじくも言われた。この講堂には一段高い講壇というものがない。それは教師も学生も同じ平面で真理に向いあうことの象徴なのだ、と。同感である。私流のたとえでいえば、真の大学教育においては、学問における「万人司祭主義」が妥当すべきなのだ。

東大の安田講堂前の芝生には、それなりに大学の革新を求める学生たちがテント村をつくり、こんなスローガンをかかげている。「われわれはここから新しい大学コミューンを建設してゆこう」と。だが大学の再生は、研究室や演習室を閉鎖し芝生の上に出てゆくことから果たして期待できるものだろうか。むしろ、新しい大学の生き生きしたヴィジョンは、既成の諸大学の「伝統」だの硬化した「機構」だのから自由なところで、教師と学生とが自発的に集まっていとなむ、真に学問的な「コミューン」の中にこそ求めらるべきではないのだろうか。——騒乱罪の適用を招いた非常識な学生デモを一日後にひかえ、八王子の丘をくだりながら、私の胸にはこのような思いがしきりに去来したのであった。

第19回大学共同セミナー

主題——ヨーロッパとは何か

昭和43年10月19・20日

〈全体講義〉

ヨーロッパ論の一視角

東京大学教授　堀米庸三氏

〈セクション別指導者〉

A　ヨーロッパとビザンツ

一橋大学教授　渡辺金一氏

B　ヨーロッパ概念の変遷

一橋大学助教授　山田欣吾氏

C　近代ヨーロッパと中世

東京大学助教授　成瀬　治氏

D　現代ヨーロッパと中世

東京大学助教授　木村尚三郎氏

〈参加学生〉

九〇名（うち女子四〇名）

早大（二〇）、慶大（八）、日本女大（八）、東京女大（八）、津田塾大（七）、一橋大（六）、東大（五）、青学大（四）、日大（三）、上智大（三）、成蹊大（二）、教育大（二）、聖心女大（二）、独協大（二）、ICU、外語大、お茶の水女大、横浜国大、都立大、中大、立大、法大、明大、玉川大各一名

■主題の主旨

ヨーロッパの没落が最初に予言されたのは、半世紀以上もまえのことであるが、ヨーロッパとは何かが論ぜられたのも、同程度ないしはそれ以上に古いことである。しかし没落という危機感をもって、ヨーロッパとは何かが問われたのは、第二次世界大戦後のことだと思う。これは二つの大戦をへて、世界におけるヨーロッパの地位が相対化されたことの結果であろう。その相対化現象は、世界史の構造が一変したことの反面でもある。

ヨーロッパの危機はしかし、ヨーロッパのみにとどまるものではなく、ヨーロッパを媒介に、近代化を試みたすべての国々の問題でもある。ヨーロッパを半ば以上に文化的体質としている私ども日本人にとって、この問題は就中、切実な意味をもっている。ヨーロッパは、着物やバスのように、自由に脱ぎ着したり、路線をかえたりできるものではない。

それなればこそ、わが国でも多くの人々によって、この問題が論じられているわけであるが、学問の立場をふまえながら、しかも総合的観点を失わずにこの問題を論じたものは、決して多くはない。増田四郎氏の『ヨーロッパとは何か』は、小冊子ながら、このような少数の研究に入る一つである。この書物をテキストにしながら、私ども自身の問題である「ヨーロッパ」を、新しい世界史の次元において論じあうことは、おそらく、今日最も実りある成果を期待しうることだろう。

千人会　第四回報告（申込順）

A＝年額　一〇、〇〇〇円
B＝年額　五、〇〇〇円
C＝年額　三、〇〇〇円

C　神奈川大学助教授　加倉井茂樹殿
C　成蹊大学教授　村瀬　興雄殿
C　東京学芸大学教授　土田　貞夫殿
C　東京学芸大学教授　太田　善麿殿
C　日本女子大学助手　大川　陽子殿
B　青山学院大学教授　森田　信義殿
B　一橋大学教授　磯野　修殿
B　青山学院大学教授　田島　信之殿
C　東京神学大学助教授　熊沢　義宣殿
C　青山学院大学教授　神山　妙子殿
C　三和プレシーザー社員　古本　捷治殿
B　一橋大学教授　板垣　与一殿
A　匿　名殿
B　立教大学教授　久保田キヌ子殿
C　東京大学助教授　芳賀　徹殿
A　服部時計店工場精工舎課長　中村　哲哉殿
C　日本体育大学講師　小島　憲正殿

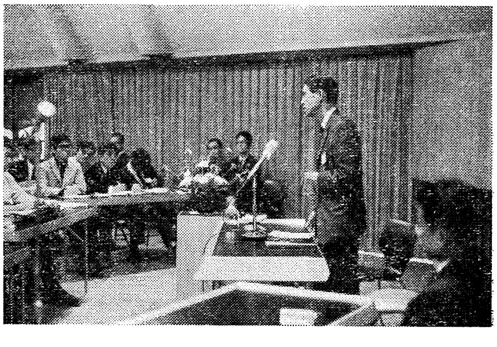
C　青山学院大学助教授　谷　清殿
B　東京大学名誉教授　朱牟田夏雄殿
C　東京医科歯科大学教授　永井　裕殿
C　東京教育大学教授　和田　義信殿
C　大学セミナー・ハウス職員　山根　艶子殿
B　法政大学教授　内山　尚三殿
B　東京女子大学教授　中村　進殿
C　東京女子大学教授　小河原正巳殿
C　東京女子大学教授　北沢　佐雄殿
C　東京女子大学教授　永井　晃子殿
C　東京大学教授　藤原　鎮男殿
C　早稲田大学助教授　長谷川幸男殿
B　東京大学社研教授　石田　雄殿
B　東京大学教授　川田　侃殿
B　東京大学教授　坂本　義和殿
C　明治大学教授　宮崎　茂樹殿
C　久保田喜久子殿
C　日本女子大学図書館友の会員　土井恵美子殿
A　日本大学総長　永田菊四郎殿
C　日本大学教授　岩井　肇殿
A　公認会計士　石田　鉄三殿

B　公認会計士　加藤　久明殿
B　公認会計士　大田　末穂殿
C　公認会計士　大槻　盛一殿
C　公認会計士　遠藤　平治殿
C　公認会計士　高山　利勝殿
B　中央大学教授　石原　忠男殿
C　法政大学助教授　西川大二郎殿
C　東京大学助教授　公文　俊平殿
C　専修大学教授　石渡　績殿
C　日本私立大学連盟事務局長　山本　芳夫殿
C　東京農工大学教授　大野　泰雄殿
A　東京工業大学教授　永井　道雄殿
A　東京工業大学教授　松田　武彦殿
C　東京大学助教授　小堀　巌殿
B　富士産業社長　力石誠之助殿
B　公認会計士　平岡　勇殿
C　東京女子大学教授　玉川　直重殿
C　東京国際総合保険センター取締役　速水　清殿
C　公認会計士　鳥海　俊宏殿

増田四郎先生の還暦を祝う夕

昭和43年10月16日

われらの理事長一橋大学長増田四郎先生は一〇月二日に還暦を迎えた。第一九回共同セミナーの主題は増田四郎先生の著書『ヨーロッパとは何か』（岩波新書）としたので、セミナーのゲストとして増田先生を招待した。



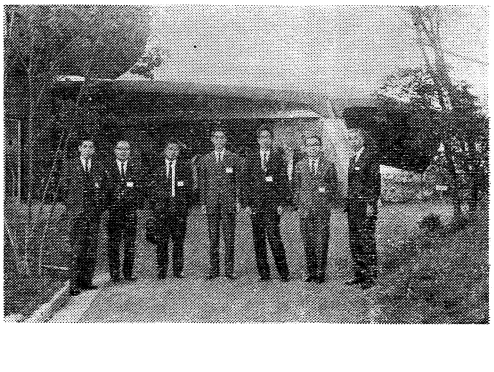
堀米教授の全体講義

夕食後の懇親会を講堂に移し、もっぱら増田先生の還暦を祝う夕となった。堀米庸三教授が友人として増田理事長の人柄を紹介され、学者として、人間として尊敬しているという側面をユーモアをもって語られ、今後の健康を祈られた。

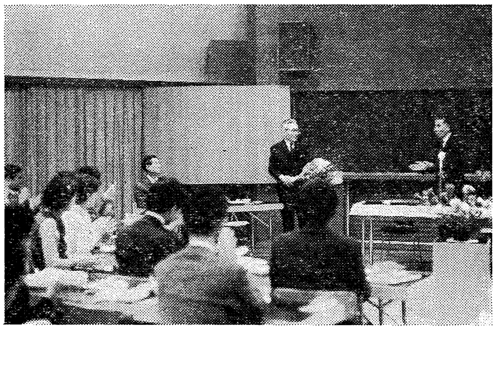
学生からお祝いの花たばを贈るとともに喜びの歌を合唱し、また日本女子大と慶応大学の学生によるフォークソングの合奏があった。

学生代表がお祝いのことばを飾らざる態度で述べられ、ほほえましい情景をかもし出した。

増田先生も喜びに顔をほころばせお礼の挨拶を述べ、学者としての学問の遍歴を語られた。一同の拍手に送られ花たばを手にして六〇年の人生を味いつつ帰られた。



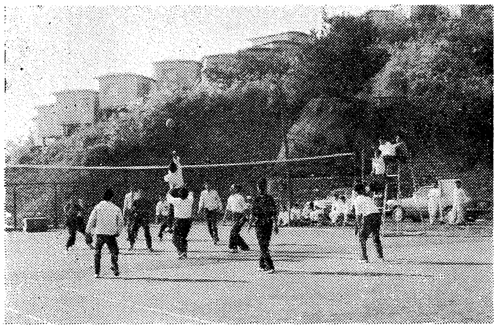
左より川原、木村、成瀬、堀米、渡辺、山田、飯田の諸氏



歴史家にふさわしい還暦のお祝い

三年間をふりかえって

大学セミナー・ハウスはこの七月で満三年、利用者は次表のように年々増加し、三年間で延べ七六、一七九名を数えた。月別(第2表)の利用状況をみると、三月、七月、八月が最も多く、比較的余裕があるのは六月、一一月で、一月、二月が最も少ない。このような増減は学期試験や卒業試験などの期日によるものと推測されるが、会員校の先生方は積極的に利用方法を考えてほしい。なお学生が個人的に読書や卒論のまとめに来ることも歓迎したいから、先生方はよい学生をご紹介下さい。また質の高い社会人の利用も考慮したい。



バレーもできるテニスコート

（第１表）　３年間の宿泊者延人員調（どこがよく使用するか）

	期間	会員校		非会員校		大学連合		学会		その他(法人・団体)		宿泊者合計	1ヵ月平均宿泊人数
		回	人	回	人	回	人	回	人	回	人	人	人
第１年目	40年７月～41年３月	155	6,090	18	583	12	1,247	5	400	8	937	9,257	1,029
第２年目	41年４月～42年３月	380	11,672	60	1,558	36	4,990	29	3,219	59	2,914	24,353	2,029
第３年目	42年４月～43年３月	426	13,693	89	4,414	32	3,845	21	2,773	68	8,628	33,353	2,779
第４年目	43年４月～43年６月	128	5,299	27	2,674	5	376	3	289	10	578	9,216	3,072
計		1,089	36,754	194	9,229	85	10,458	58	6,681	145	6,681	76,179	

（第２表）　何月がよく使われるか

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
41年４月～42年３月	回数	43	44	37	50	47	27	64	68	57	22	50	54
	人数	1,834	1,574	1,256	2,880	3,026	1,938	2,572	1,980	1,863	676	1,729	2,794
42年４月～43年３月	回数	60	56	34	46	25	52	66	66	69	38	49	75
	人数	4,011	3,389	2,112	4,211	3,977	2,234	2,483	2,139	2,379	825	1,459	4,134
43年４月～43年７月	回数	62	52	59	62								
	人数	3,526	3,896	2,334	3,638								

42年度利用回数調（42・4～43・3）

〔A〕大学別利用回数調

1　東京都立大学　五一回
2　早稲田大学　四三回
3　慶応義塾大学　四〇回
4　東京大学　三〇回
5　明治学院大学　二九回
6　中央大学　二八回
7　一橋大学　二二回
8　日本女子大学　一九回
8　日本大学　一九回
9　法政大学　一八回
9　立教大学　一八回
10　青山学院大学　一七回

〔B〕教官別利用回数調

5回　明治学院大学助教授　吉田裕
4回　法政大学教授　尾形憲
　法政大学教授　栢野晴夫
　上智大学教授　鈴木皇
3回　日本女子大学教授　一番ヶ瀬康子
　慶応義塾大学助教授　池井優
　早稲田大学教授　川原栄峰
　東京工業大学教授　松田武彦
　東京大学助教授　西村秀夫
　立教大学講師　大橋泰二
　慶応義塾大学教授　沢田允茂
　青山学院大学助教授　関田寛雄
　明治学院大学教授　重田信一
　明治学院大学講師　高橋勇悦
　東京大学助手　谷口晋

新しく売店を設置

アンケートにも売店がないので困るということが書いてある。サービス・センターは何をサービスするところですかといわれて返事に困ることもある。改造にも戸棚などの備品類にも相当の経費がかかるし、人手のこともからんで、なかなか実現しなかった売店も、やっと十月一日に開店となった。

セミナー室からも宿舎からも中央に位置しているサービス・センターに売店をつけたので、サービスは少し改善されたわけである。たばこ、飲料水、菓子、文房具、日常雑貨など一応のものが揃っている。

ビールの乾杯でささやかな店開きをして、スタートした。

開店日の売店風景

忙しい夏の舞台裏
盛況にうれしい悲鳴

業務課からセミナー参加者の生態を見る

（一）

七、八月は大学の夏休暇。したがって当ハウスの利用者の質も、セミナーの規模も、他の時期とはかなりの相違がある。もう今年の夏で四回である。夏の大会はセミナー・ハウスでといった常連がぼつぼつできるようだ。一回来たらいやになったといわれるよりは当事者としてはうれしいことである。

夏の利用者の特徴を列挙すればつぎのようなものである。

一、三泊四日から一ヵ月にわたるような比較的長期のものが多いのも休暇のためである。

二、学会、研究会、大学連合のセミナーが多い。

三、国際的セミナーが多い。

四、休暇中でも大学院や学部学生のゼミが来る。

五、予約のキャンセルが多い。

（二）

多摩丘陵といっても多少は涼しいが夏は暑い。一〇日とか二〇日とかここにこもって勉強する姿には敬意を表したい。三泊以上のグループが二五で、全体の二二％に及んでいる。

ハイキングに出かけたり、テニスをしては勉強の息抜きをされる。時には西瓜やケーキを持ってゼミの学生を慰問される先生やOBが訪れることもある。

（三）

北海道から九州まで先生や学生がいろいろな学会やセミナーに出て来られる。うわさにきくセミナー・ハウスはこれですかと感嘆される。ここのチャイムをきくと急行で仙台あたりを走っているような気がするそうだが、東北線のチャイムと同じらしい。

食事ごとに食堂に歩いて来るのは大変なようだが、よく考えてみると、これは素晴らしいアイディアだといわれるのは、一泊二日だけの滞在者ではわからない感想である。

（四）

フルブライト委員会と大学英語教育学会共催の英語教育セミナー（四二、四三年）、アメリカン・フィールド・サービス（四二、四三年）、日米学生会議（四二、四四年）、国際経済商学学生協会（四二、四五年）、国際コラーゲン討論会（四二年）、東日本連合宣教大会（四三年）、日本ユネスコ協会連盟の日韓学生セミナー（四二、四三年）、アジア太平洋歯科学生連合（四三年）、キリスト者学生会（四三年）などは大人というか社会人の大きな集会であり、国際的な性格のものである。

野菜しか食べない人がいたり、ひとりでないと浴場へ入らない人だの、夜おそくまでギターをひく人もいて習慣の違いであろうか。

（五）

夏休中に実施したセミナー一一五回のうち、八〇％が学生であるから、やはり学生は勉強する人種である。学生を批評する人はセミナー・ハウスの学生にも注目しなければなるまい。

（六）

キャンセルの多いのは困ったものである。夏休みなので他の計画に変更するのであろうか。事故者が多い。休暇中は幹事の学生との連絡がとりにくいのも困ったこと。集まった学生が申込みの半数であったり、八月三一日には七つのセミナーで無断欠席が四〇名もあり、最もその被害をうけるのは食堂である。申込数で食事の準備をするからである。

七月、八月、九月にかけて、大学紛争の影響もあって、申込みのキャンセルが三三件、延べ一、五〇〇人にものぼった。正に異変というべきである。

（七）

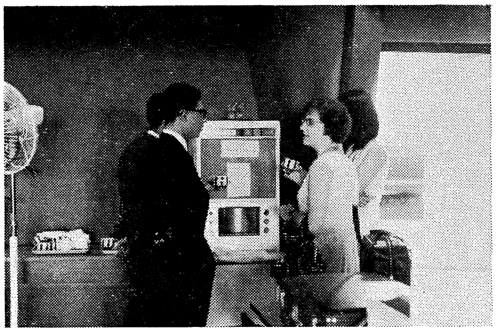
講堂が昨年七月に建築されたことによって、夏の活動は拡大された。食堂を講堂代わりに使用していた創業当初の不便は改善された。テニスコートも好評で夏のセミナーにはよい運動らしい。

盆踊りも夏の名物になった。毎年外人の多い日を選んで、地元の婦人、青年の協力を得て彼らの旅をなぐさめている。彼らはすぐに踊りの輪に入ってしまう。

横田基地が近いので米軍飛行機の通路に当っているらしく、当ハウスの上空を飛んでいく。講義を中断するような騒音になやまされる。困った難問である。

富士電機寄贈の自動湯茶冷水機設置さる

これはすばらしく重宝な新製品である。湯茶がでる。冷水がでる。白湯がでる。昭和四三年七月五日に本館一階ロビーに設置した。時は夏でもあり、その利用価値は満点。受付を終って一息入れながらお茶のサービスができるようになった。近来のよい寄贈である。



到着したらまずお茶を（本館ロビーで）

盆踊り大会

八月二四日午後七時より、本館前の広場で恒例の盆踊り大会が開かれた。地元の人々約二〇〇名がゆかた姿で夕涼みがてら訪れ、やぐら太鼓を囲んで夏の一夜を楽しんだ。当夜はAFSサマーキャンプの米高校生も参加し、地元の人人と交歓し、八時半に名残りを惜しんで散会した。どうやらセミナー・ハウスの名物となったらしい。

楽しい夏の夕べ

推薦図書

新入学生歓迎セミナー指導教授推薦

杉田玄白「蘭学事始」（岩波文庫）
小川鼎三「解体新書」（中公新書）
坪井忠二「新・地震の話」（岩波新書）
カール・ヤスパース「哲学的自伝」（理想社）
アンドレ・モロワ「フレミングの生涯」
ローラ・フェルミ「フェルミの生涯」
インフェルト「真実を求めて——アインシュタインの生涯——」
小堀憲「大数学者」
矢内原忠雄他「人生の選択——矢内原忠雄の生涯——」（大学セミナー・ハウス叢書No 1）
山内恭彦「科学と人生」（講談社新書）
〈上智大学教授　**鈴木皇**〉

福沢諭吉「学問のすすめ」
田口卯吉「日本開化小史」
中江兆民「三酔人経綸問答」
内村鑑三「余はいかにしてキリスト信徒となりしか」
陸奥宗光「蹇蹇録」
志賀重昂「日本風景論」
柳田国男「先祖の話」
プラトン「ソクラテスの弁明」「クリトン」「饗宴」
〈立教大学教授　**久保田キヌ子**〉

C・ディ・ルーイス「詩を読む若き人々のために」（平凡社・世界教養全書）
ベネディクト「菊と刀」（同右）
フランクル「夜と霧」
ゴウラー「アメリカ人の性格」（北星堂）
C・S・ルーイス「信仰の核心」（KGK新書）
伊藤勝彦「愛の思想史」（紀伊国屋新書）
〈学習院大学教授　**児玉久雄**〉

杉田玄白「蘭学事始」（岩波文庫）
福沢諭吉「福翁自伝」（同右）
今泉みね「名ごりの夢」（平凡社・東洋文庫）
アーネスト・サトウ「一外交官の見た明治維新」上・下（岩波文庫）
津田左右吉「文学に現はれたる国民思想の研究」第四巻（岩波書店）
岡義武「近代日本政治史」上（創文社）
森鷗外「舞姫」「うたかたの記」「文づかひ」「即興詩人」
E・フロマンタン、市原豊太訳「ドミニック」（岩波文庫）
夏目漱石「門」
フロベール「感情教育」（筑摩世界文学体系）
シュトルム「みづうみ」（どの文庫版でも）
〈東京大学助教授　**芳賀徹**〉

ニーチェ「ツァラトゥストラはかく語った」
サルトル「嘔吐」
ドストイエフスキー「地下生活者の手記」
ツルゲネフ「父と子」
〈早稲田大学教授　**川原栄峰**〉

三谷隆正「幸福論」（近藤書店、岩波書店・三谷隆正全集所収）
クリスティ・矢内原忠雄訳「奉天三十年」上・下（岩波新書）
ヴィダル・ドウ・ラ・プラーシュ　飯塚浩二訳「人文地理学原理」上・下（岩波文庫）
飯塚浩二「アジアの中の日本」（中央公論社）
矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」（岩波書店、岩波書店・矢内原忠雄全集所収）
〈東京大学助教授　**小堀巖**〉

ゲーテ「ファウスト」
リッケルト「文化科学と自然科学」
マックス・ウェーバー「職業としての学問」
ネルー「インドの発見」
上原専禄「歴史的省察の新対象」
〈一橋大学助教授　**深沢宏**〉

個人利用の体験記

土居　桂子
土井万里子

五月、学生課主催のフレッシュマン・キャンプに上級生として参加した私たちは、このセミナー・ハウスにすっかり魅せられてしまいました。是非また来ようとの強い思いを胸にして山を去りました。

東北に京都に、あるいは故郷にと、本を離れてとびまわる秋休みに、二人は旅にでも出るような軽快な心で八王子にやって来ました。英語の本と辞書とノートを抱えて……。都心からも比較的近いのは重い本を抱えていかなくてはならぬ私たちにとって本当に助かりました。

ほとんどの人はゼミナール単位でやってきていますので、図書館はいつも私たちで占領してるみたいでした。大きくはないけれど室内は明るい。勉強しやすい机と椅子。辞書類も豊富ですし、そのうちには卒論を書く人のためのキャレルも用意して下さるとか。

グループで行った時には考えられないほど自由に時間が使えることも魅力です。好きな時に勉強をし、いやになれば外を歩き（もっとも勉強以外にすることのない環境を求めて行ったのですが）、眠くなれば眠る。夕食のデザートをユニット・ハウスに持ち帰って夜のお茶の時食べたり、計画的に寝坊をして朝食を抜いたり。

滞在の五日間は、〝もっとたくさんできるはず〟という欲のためかペースがのろく感じられましたが、他にすることもなかったせいでしょう。かなり成果はあがったようです。

グループ利用の時はついついグループの人たちだけと固まってしまいがちですが、個人として行ってみてセミナー・ハウスの人々、ひとりひとりの親身のお世話が一層うれしく、他のグループの人たちとも話すことができ楽しい秋休みでした。

（津田塾大学英文科）

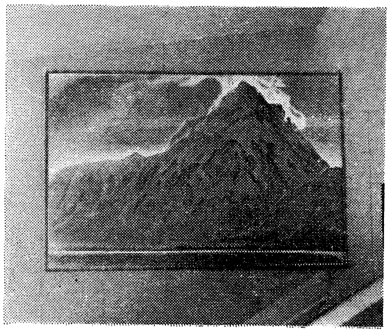
絵の大額かかる

佐藤喜一郎氏の寄贈

昭和43年8月30日

本館ロビーから食堂へ通じる階段横の壁面にすばらしく大きな日本画がかかった。一段と館内の美観を加えている。川端竜子画伯の高弟安西啓明画伯の作品である。北海道の昭和新山を画いたもの。偉風堂々として、よく建築の構造に調和している。いつも変らない佐藤喜一郎後援会長のご高配に心から深謝したい。

安西画伯は東京シリーズの名作で知られる当代の一人者である。ここに集う人々の眼を楽しませる宝物が一つふえたわけである。



利用状況

◆七　月

東京キリスト教短大講師　鋤柄和秋
一橋大学助教授　佐々木潤之介
東京神学大学助教授　熊沢義宣
法政大学教授　安達遂
法政大学教授　栢野晴夫
お茶の水女子大学教授　中村英勝
早稲田大学教授　井上宇市
東京工業大学教授　益子正巳
日本女子大学教授　青山吉信
東京学芸大学教授　小林幸輔
東京都立大学教授　石村善助
大妻女子大学教授　中川竜一
早稲田大学教授　小林寛
早稲田大学教授　吉阪隆正
横浜国立大学助教授　伊藤忠彦
東日本連合宣教の集い　菅野猛
小田急電鉄（中堅社員教育）
国際基督教大学講師　並木浩一
国際基督教大学講師　田川建三
東京都立大学助教授　金子ハルオ
慶応義塾大学教授　鬼頭史城
東京都立大学助教授　佐藤英男
早稲田大学教授　松田正一
一橋大学助教授　藤原彰
早稲田大学教授　尾関守
青山学院大第二部教育学科読書会
立教大学教授　久保田キヌ子
東京工業大学助教授　武者利光
独協大学教授　林俊一
中央大学助教授　笹原昭五
日本大学教授　小川潤次郎
大学英語教育学会　朱牟田夏雄
仙川教会（夏期修養会）
慶応義塾大学講師　山口喬
成蹊大学教授　宇野重昭
群馬大工業短期大学教授　中山勉
東京外語大学助教授　原誠
東京理科大学助教授　菊地武
東京写真大学助手　藤ノ木敏明
東京都立大学助教授　小西悟
青山学院大学講師　村上泰治
成蹊大学教授　村瀬興雄
成蹊大学教授　松尾登
東京学芸大学助教授　斉藤耕二
津田塾大学助教授　小林稔
東京大学助教授　池上嘉彦
不動建設（新入社員教育）
立教大学児童指導クラブ
東京工業大学助教授　道家達将
小田急電鉄（中堅社員教育）
慶応義塾大学教授　沢本孝久
早稲田大学教授　村松林太郎
東京都立大学教授　保坂敬太郎
早稲田大学助教授　北野弘久
日本女子大学教授　一番ヶ瀬康子
都立商科短大教授　長田光展
弓町本郷教会聖歌隊
東京理科大学教授　伊丹邦夫
白梅学園短大教授　田中未来
明治大学教授　斉藤正直
日韓ユネスコ学生討論会

◆八　月

アジア太平洋歯科学生会議
中渋谷教会修養会
語学教育振興会議　羽鳥博愛
狛江教会全体修養会
第一回家族社会学セミナー　岡田謙
東京都立大学助教授　山本三三三
早稲田大学助教授　内田満
横浜国立大学教授　森弘毅
東京学芸大学教授　太田善麿
セントラル自動車（リーダーシップ養成講座）
全国高等学校家庭クラブ指導者養成講座
伯東株式会社（中堅社員訓練会）
共立女子大短期大学助教授　青山誠子
早稲田大学教授　尾関守
キリスト者学生会
語学教育振興会議　島岡正
東京工業大学教授　伊沢計介
東京工業大学助教授　古川静二郎
東京工業大学教授　末武国弘
独協大学教授　赤井彰
東京都立大学教授　伊丹潔
尾山台北教会青年会修養会
東大ディケア研究会　高橋哲郎

施設拡充資金寄付者

（第7回報告、昭和43年7〜10月）

一〇、〇〇〇円　お茶の水女子大学教授　遠見豊子殿
七、六〇〇円　小田急電鉄中堅社員研修会殿
八〇〇円　津田塾大学職員　外村シヅ殿
六、〇〇〇円　独協大学林ゼミ殿
二、二八〇円　成蹊大学宇野ゼミ殿
三、七〇〇円　成蹊大学村瀬ゼミ殿
一〇、〇〇〇円　前東京教育大学長　三輪知雄殿
八、〇〇〇円　小田急電鉄中堅社員研修会殿
五〇〇円　慶応義塾大学教授　中島茂夫殿
二、〇〇〇円　日本女子大学女子教育研究所員　山本和代殿
三、〇〇〇円　立教大学教授　久保田キヌ子殿
一〇、〇〇〇円　日本女子大学名誉教授　大原恭子殿
五、〇〇〇円　東京都立大学教授　唄孝一殿
五、〇〇〇円　東京教育大助教授　森岡清美殿
八二〇円　国立市　西野文雄殿
一、〇〇〇円　東京都立大学教授　伊丹潔殿
一、二五二円　東京工業大学古川ゼミ殿
五〇〇円　八王子市　太田喜美夫殿
一、〇〇〇円　明治大学教授　山崎英三殿
二、〇〇〇円　杉野女子大助教授　田村皖司殿
一、〇〇〇円　神奈川大学助教授　田村献殿
二、三四〇円　東京大学丸山ゼミ殿
一、四〇〇円　神奈川大学田村ゼミ殿
三、〇〇〇円　立正大学杉沢ゼミ殿
五、〇〇〇円　千代田運輸殿
二、〇〇〇円　弓町本郷教会教師会殿
一〇、〇〇〇円　円堂建築設計事務所殿
二、一〇〇円　早稲田大学井上ゼミ殿
三、〇〇〇円　拓殖大学佐藤ゼミ殿
一、五〇〇円　中央大学近藤ゼミ殿
一、〇〇〇円　青山学院大学原ゼミ殿
一〇、〇〇〇円　格子欠陥会議殿

■特別指定寄付

〔植樹〕
三、〇〇〇円　東京理科大学菊地ゼミ殿
二、〇〇〇円　大学英語教育学会
四、七八九円　第一八回大学共同セミナー殿
二、〇〇〇円　大学英語教育学会
一〇、四九〇円　全国高等学校家庭クラブ連盟、第九回指導者養成講座殿
五、〇〇〇円　お茶の水女子大学新入生セミナー殿

〔上代池造園費〕
一〇、〇〇〇円　日本女子大学図書館友の会　上井恵美子、北野美枝子殿
一、〇〇〇円　茨城県下妻市　福西基殿
五、〇〇〇円　バーミンガム、ウッドブルク大学内　三保文江殿
二、〇〇〇円　茨城県下妻市　福西基殿

〔図書費〕
四、七〇六円　第一九回大学共同セミナー殿

利用状況（つづき）

数造形計画研究所
関東学生華道連盟夏季研修会
白梅学園短大助教授　北　郁子
東京家政学院大学光塩会
東京都立大学助教授　門村　浩
横浜明星教会
東京クリスチャン学寮
東京大学助教授　見田　宗介
東京外国語大学教授　河部　利夫
八王子市中央婦人大学
早稲田大学教授　村岡　哲
東京都立大学教授　千葉　正士
早稲田大学講師　森藤　一男
杉野女子大学助教授　田村　皖司
武蔵工業大学教授　中岡　二郎
東邦大学助教授　本吉　修二
東京都立大学教授　平山　輝男
日本土木系学生会全国大会
東洋大学教授　田中　陽児
東京都立大学教授　佐藤　隆夫
東京大学教授　芦部　信喜
AFS日本協会（日米合同キャンプ）

◆九　月

東京大学教授　芦部　信喜
一橋大学教授　石田　忠
日本女子大学教授　青山　吉信
日本女子大学助教授　小川　信子
神奈川大学助教授　田村　献
横浜国立大学経済学科越村ゼミ
青山学院大学講師　柳原　光
東京大学教授　丸山　真男
東京成徳短大講師　永坂田津子
東京工業大学教授　益子　正巳
立教大学講師　淡路　剛久
東京大学消費生活協同組合研修会
早稲田大学教授　吉阪　隆正
早稲田大学教授　川原　栄峰
立教大学教授　神島　二郎
東京大学助教授　山之内　靖
青山学院大学助教授　手塚　喬介
全国商工会連合会経営指導員研修会
一橋大学助教授　田内　幸一
国際基督教大学教授　中島　省吾
青山学院大学教授　天利　長三
立正大学助教授　杉沢　新一
電気通信大学教授　大須賀政夫
日本リクルートセンター
稲毛屋（社内教育訓練）
東京大学講師　鈴木　淳一
慶応義塾大学助教授　松浦　保
立教大学教授　武沢　信一
六角橋教会教師会　出口　力
弓町本郷教会教師会　大倉　幾代
千代田運輸職員講習会
東京都立大学教授　森脇大五郎
国際基督教大学 Faculty Retreat
電気化学工業（英会話講習会）
中央大学助教授　住吉　博
稲毛屋（社内教育訓練）
円堂建築設計事務所長　円堂　政喜
中央大学教授　稲垣富士男
早稲田大学教授　井上　勇
一橋大学助教授　塩野谷祐一
拓殖大学教授　佐藤　和男
白梅学園短大教授　井手　則雄
中央大学教授　世良　正利
法政大学教授　内山　尚三
東京都立大学教授　塩田庄兵衛
上智大学助教授　松本　栄二
中央大学教授　近藤　圭一
白梅学園短大講師　神立　春樹
東京都立大学教授　岡本　哲治
日本キリスト教協議会
武蔵大学助教授　中村　瑞穂

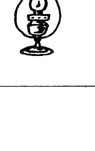
◆一〇月

成蹊大学講師　佐瀬　昌盛
明治学院大学教授　天達　忠雄
東京都立大学教授　林　栄夫
学習院大学教授　末松　保和
明治学院大学教授　畑井　義隆
明治学院大学助教授　増田　茂樹
東京工業大学教授　松田　武彦
東京都立大学教授　山崎　康男
東京都立大学教授　東　洋一
東京女子大学助教授　笹尾　靖也
東京工業大学ＥＳＳ
成蹊大学教授　市井　三郎
日本女子大学助教授　富山はつ江
東京外国語大学助教授　岡本　康雄
中央大学助教授　村田　稔
学生セミナー研修会
東京都立大学助教授　二村　敏子
東京学芸大学社会心理研究会
東京女子大学教授　佐山栄太郎
中央大学助教授　池田　正孝
東京学芸大学教授　鈴木　清
立教大学教授　岩井　祐彦
東京大学教授　星野　英一
東京大学助教授　小柴　昌俊
東京女子大学助教授　根岸　愛子
東京都立大学助教授　松原　稔
東京都立大学教授　宝月　欣二
立教大学教授　三宅　義夫
東京都立大学助教授　関口　晃
明治学院大学講師　エミリー・フレミング
青山学院大学助教授　原　豊
東京都立大学教授　関　嘉彦
中央大学助教授　寺内礼治郎
第一七回共同セミナーEセクション（読書会）　小堀　巌
住友商事非鉄原料課（仏語勉強会）
東京工業大学新入生セミナー
日本大学理学部混声合唱団（役員研修会）
大妻女子大学教授　須沼吉太郎
東京告白教会（聖書研究会）
東京学芸大学助教授　大橋　幸
東京都経済局（経営指導員研修会）
東京都立大学教授　木村　錬一
東京大学理学部（格子欠陥会議）
日本機械学会（学生公開講座）
日本女子大学教育学科（大学祭準備会）
立石電機（新入販売員研修会）
東京工業大学教授　益子　正巳
慶応義塾大学講師　安達　和夫
日本大学マンドリンクラブ
法政大学講師　佐々波秀彦
東京都立大学助教授　佐藤　敦久
玉川大学教授　戸川　尚
八洲電機（管理者研修）
東京都立商科短大哲学研究会
第一七回共同セミナーFセクション（読書会）
東京都立大学教授　本部　均
日本生産性本部経営アカデミー
東京都立大学助教授　清水　誠
東京都立大学助教授　板津由基郷
立教大学教授　高畠　通敏
早稲田大学碧稲会　川原　栄峰

専務理事後記

九月に発行すべきこのニュースが一一月まで延びてしまって、全く不定期刊行になってしまった。私はこの三ヵ月、敷地拡張に必要な土地売収費を国会と都議会に請願するため全精力を投入した。先生方と学生諸君の協力を仰いで署名運動を展開した。

近来急に大学セミナー・ハウスの周辺にまで宅地開発の波が押しよせるようになったので、どうしても環境を死守せねばならなくなったからである。

一一月一日に茅・増田両先生と美濃部都知事を訪問し、請願書を手渡し、そして一三日には坂田道太文教制度調査会長に国会請願書の手続を依頼した。いずれも協力を約束して下さった。

文部省発行の『厚生補導』九月号に「大学における人間関係の回復」を、一一月一四日の『読売新聞』に「人材育成の苗床――大学セミナー村建設に国の大いなる援助を――」という拙文を書いた。三年間の成果を社会に報告したつもりである。